

鉄砲洲神社 論語素読 解説

(平成22年1月25日)

学而第一

1 通一 しいわ子曰く、まな学ときびてこれ時になら之をまた習よろこう。亦 とも説えんぼうよばきたしあからまたずや。朋の遠方また自くんしり来またる有またたのり。亦またたの楽またたのしまたたのからまたたのずや。人ひと知いらいずいしてい慍いらいず、亦 また君子またなまたらまたずや。

孔子が言いました。

学んだ後、随時復習をする。思い出す都度、学び直す。繰り返し繰り返し学んだところを復習する。これは何と楽しいことだろう。繰り返すたびに、自分の心の奥まで知恵が入ってくるという実感が起きる。これは何と嬉しいことか。

同学の人が遠い所からわざわざ訪ねて来てくれた。これは又、何と楽しいことか。

自分の学問が相当なレベルに達したと思っても、周りの人達は誰も知らない。誰も自分のことを知らなくても、不平不満に思わないのは何と奥ゆかしいことか。これぞ君子といってもよいだろう。

論語を今風に眺めてみましょう。

今の教育は、子供が喜んで勉強しようという気持ちにさせるような教育をしていないのではないかと感じます。

同じ学問を習っている者が遠方から来る。今の時代はパソコンがあって世界各地どこでもすぐに通じ合える。これも又、孔子の時代とは違って非常に楽しいものであると考えても良いでしょう。

一番肝心なところは、自分がかなりのレベルに達した時に、「何故私のことを知らないのか」と腹を立てるということが、今は当たり前になっています。自分自身を世の中に知らしめる為に手練手管を使う。これは君子ではないと断言してもよいだろう・・・とお読み戴くとよいでしょう。

ちなみに渋沢栄一さんの説を申します。

学ぶというのは、行なうの半分くらいである。学ぶ所を実際に使わなければ、残りの半分は身に付かない。時々刻々一所懸命習って、習って、そこで初めて知行合一の本意にかなう。学問は人間の実生活に役に立たなければ、何の意味もない。実践がともなわなければ朱子学の空理空論に陥り、学者は論語読みの論語知らずとして世に嘲ら

れるであろう。

つまり、学ぶからには実行せねばならない、ということを言っています。

同じく、「人知らずして慍らず」の部分については、

普通の人、ある程度のレベルに達すると、周りが自分のことを認めてくれなければ、悲観して氣を腐らせてしまう。自分自身は84歳の現在まで、論語のこの部分を実行している。我が身の尽くすべきことを尽くしさえすれば、それが人に知られず、世間に容れられようが容れられまいが一向頓着ない。決して憤るとか立腹することはせず、きたつもりである。

と、書き残しています。

論語を一文で表すとどうか、という質問に対して、論語はこの文章(学而第一 1)を理解すれば良いと答える方もいます。それだけの奥行きのある文章だと感じています。

2 ゆう しいわ そ ひと な こうてい かみ おか この もの すくな かみ おか
有子曰く、其の人と為りや孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯
この らん な この もの いま こ あ くんし もと つと
すことを好まずして、乱を作すことを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。
もとた みちしょう こうてい もの そ じん な もと
本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁を為すの本か。

有子がいきました。

その人物を見るのに、父母によく仕え、兄長によく仕えている孝弟の者が反乱を起こすことは非常に少ない。目上の者に逆らうことを好まない者で、争いごとをするなどということは今まで聞いたことがない。君子は根本を大事にする。根本が確立すれば、道は自然とできてくるものだ。孝行者は仁者になる根っこがあると言えよう。

現代で考えます。

自民党で厚生大臣をした舛添さんが親の介護をしたと人気が出ましたが、今の政治家で孝行者がいるのでしょうか。政治家で、親孝行をしている人、親の介護・妻の介護をしている人のリストが見たいものだなと思っています。本当に親孝行であれば、争いごとを生み出すということはないでしょうし、このことを考えれば、わざわざ塀の上をどちらが落ちるか分からないというような歩き方をする政治家も減ってくるのではないかと考えます。まず、政治家の中で親孝行者を探すというのがよかろうと、この文章から連想しました。

考えてみれば鳩山兄弟はおもしろいですね。兄も弟も、母親から月々1500万円ずつ貰い続けていた。弟はどうもそのことを知っていたようですが、兄はまるで知らなかった。どちらも貰いっぱなしで、贈与税のことなど少しも浮かばなかったようです。孝弟なる者と

言ってよいのかどうか、甚だ疑問に感じます。